

2B-12) 頭蓋内眼窩内病変に対する
frontozygomatic approach について

井上 明・佐藤 進
関口賢太郎・大倉 良夫 (山形県立中央病院)
玉谷 真一 (脳神経外科)
太田 勝哉 (山形県立中央病院)
形成外科

我々は頭蓋内及び眼窩内にまたがるような病変に対して crainiofacial surgery を応用して、前頭側頭開頭に supraorbital bar を一時的に切離し、眼窩上外側壁を切除する frontozygomatic approach による手術を行っている。この方法で手術を行った4症例を報告する。

症例：症例1：59歳男。眼窩内に浸潤した蝶形骨縁髄膜腫に対して腫瘍全摘出を行った。症例2：55歳男。甲状腺癌の多発性全身性転移の症例で、頭蓋内及び眼窩内の腫瘍摘出術を行った。症例3：20歳男。交通事故で受傷し脳挫傷、前頭蓋底骨折、Blow out fracture の診断で、救命のための外減圧術施行後、頭蓋骨及び眼窩形成術施行した。症例4：52歳男。伐採中木が倒れ右眼窩部に当り受傷した。右前頭骨、頬骨、Blow out fracture を認め、慢性期に整復手術を行った。

結語：frontozygomatic approach は広い術野が得られ頭蓋底再建が容易で頭蓋内眼窩内病変には有用な手術法である。

2B-13) Brown-Séquard 型頸髄損傷の3例

廣瀬 敏士・白崎 直樹 (公立小浜病院)
脳神経外科
石井 久雅・久保田紀彦 (福井医科大学)
脳神経外科

【症例1】63歳、男。泥酔状態で、転落し受傷。左側頭部に皮下血腫を認めた。意識清明後も、右に強い四肢麻痺と、右 C₅ 以下の触覚低下、左下肢の温痛覚脱失を認めた。Brown-Sequard 型頸髄損傷と診断し、保存的に加療した。2週間後の myelography では、C_{3/4} の左側に disc を認めた。この際髄液は xanthochromia であった。MRI の T₂ 強調画像では、C_{3/4} の右側に強い high intensity を認めた。リハビリ後、独歩退院し外来通院中。

【症例2】74歳、男。バイクで転倒し、搬入。意識は清明で、右に強い四肢麻痺と、右半身の触覚低下、左半身の温痛覚低下、左前頭部に打撲痕を認めた。myelography にて OPLL と CYL による頸椎の canal stenosis を認めた。laminectomy を施行し、リハビリテーション中。

【症例3】65歳、男。左前頭部打撲により受傷。右に強い四肢麻痺と、左半身の温痛覚低下を認めた。disc に対し前方除圧・固定術を施行した。受傷機序など文献的考察を加えて報告する。

2B-14) 外傷を契機として発症した頸椎後縦靭帯骨化症の2例

二渡 克弥・松岡 茂 (秋田組合総合病院)
坂本 哲也 (脳神経外科)

頸椎後縦靭帯骨化症(頸椎 OPLL)は、上肢とくに手指の知覚障害や巧緻運動障害などにより発症することが多いが、交通事故、転落、転倒などによる頸椎への外傷を契機として脊髄症状が発現することも少なくない。今回、我々は転倒によって中心性頸髄損傷症候群と右片麻痺にて発症した頸椎 OPLL の2例を経験したので報告する。症例1は、58歳の男性で、飲酒後に自転車で転倒し前額部を打撲した。両上肢の脱力と両手指のしびれ感を訴え入院した。頸椎 Xp にて C₃₋₅ にかけて連続型 OPLL の所見と、CT で脊椎管矢状径の狭窄が認められた。C₂₋₆ の椎弓切除術による後方除圧を行い軽快した。症例2は、49歳の男性で、飲酒後にうつぶせに転倒し、直後より右不全片麻痺が出現した。頭部 CT では異常なく、頸椎 Xp、CT、MRI にて C₄₋₆ の連続型 OPLL と脊椎管矢状径の著明な狭窄が認められた。前方除圧を行い軽快した。

2B-15) 一側上肢のみの神経症状を呈する頸部脊椎症、頸部椎間板ヘルニアの画像所見の検討

藤本 真・井須 豊彦
小林 延光・板本 孝治 (釧路労災病院)
高田 達郎・浅岡 克行 (脳神経外科)

通常の頸部脊椎症、頸部椎間板ヘルニア等の頸椎病変では、一側上肢から両側へと症状が進行することはよくみられるが、一側上肢のみの神経症状を呈する場合に画像所見と神経症状とが一致せず診断、及び手術適応に際して苦慮することもしばしば経験する。今回我々は一側上肢のみの神経症状を呈し手術によって症状の改善を認めた症例の画像所見を検討したので報告する。対象は、一側上肢のみの神経症状を主訴に当科を受診し、自家椎体骨移植による頸椎前方固定術(1~3レベル)を施行された15例(男性11例、女性4例<年齢29~74歳、平均50.4歳>)。術前画像(MRI、Myelography、CTM)上、典型的 Lateral disc protrusion、spur formation を

示した症例, Paramedian disc protrusion を示した症例, Rotation にて対側の cord compression を示した症例等がみられた. 術後, 全例に症状の消失, 寛解を認めた.

2B-16) 頸部硬膜外前脊髄静脈拡張により MRI 上頸髄圧迫所見を呈した 1 例

村石 健治・府川 修 (いわき市立総合
永山 徹・本橋 蔵 (磐城共立病院
脳神経外科)
木田 浩・高原 光明 (同 整形外科)

頸髄硬膜外静脈の拡張により頸部痛及び頸椎運動制限を来たしたと考えられる症例を経験したので報告する.

症例は34歳女性, 家族歴, 既往歴ともに特記事項なし. 平成3年12月17日より激しい頸部痛, 頸椎の前屈障害を主訴に当院整形外科通院. MRI により頸髄が両外側前方より圧迫されており, 1月27日当科紹介となった. 経大腿動脈法による椎骨動脈撮影, 経大腿静脈法による頸静脈撮影では頸髄硬膜外前脊髄静脈の拡張を認め, これが MRI における異常陰影と一致した. 頸静脈閉塞や硬膜動静脈奇形等は認められなかった. 保存的療法により症状は軽快, 自宅退院となった.

2B-17) 脊椎管伸展の著明な dumbbell 型脊髄神経鞘腫の 4 例

—MRI 所見と手術アプローチ—

長谷川 健・南出 尚人 (富山市民病院
宮森 正太郎・山野 清俊 (脳神経外科)
浜田 秀剛・沖 春海 (黒部市民病院
脳神経外科)

脊髄神経鞘腫は, 頸椎, 胸椎レベルでしばしば dumbbell 型伸展を示す. 従来, 脊椎管外部分の腫瘍が大きい場合, 診断と外科的剔除に問題があった. MRI の進歩により, 管外腫瘍の伸展と周囲の解剖学的状況の詳細な把握が可能となり, 低侵襲で根治的な microsurgical approach を工夫し得る. 最近経験した dumbbell 型脊髄神経鞘腫 4 例を報告する.

症例 1: 17歳男子, 左 C2 腫瘍. lateral approach (①) で全別.

症例 2: 44歳男性, 右 C2 腫瘍. ①で全別.

症例 3: 66歳女性, 左 C8 腫瘍. posterior approach による管内腫瘍の剔除について, supraclavicular approach (②) で全別.

症例 4: 症例 1 に同じ, 右 Th1 腫瘍. ②で全別. 特に②では CUSA が有用であった. upper cervical spine で①は, 管内腫瘍にも対処しうる. cervico-thoracic

junctional spine で②は, 開胸や肋横関節の犠牲もなく侵襲は遙かに小さい. 管内腫瘍が硬膜内や大きい場合は posterior approach との併用になる.

2B-18) 頸椎椎体を用いた頸椎前方固定術の経験

齋藤 孝次・滝上 真良
藤重 正人・坂本 靖男 (釧路脳神経外科)
田之岡 篤・今泉 俊雄 (病院)

平成2年10月から頸椎椎体を移植骨として用いる前方固定術を16例経験した. 症例は34歳から70歳までの男性12人, 女性4人で対象となった疾患は頸椎症が12例, 頸椎後縦靭帯骨化症が4例である. 手術は, 1レベル8例, 2レベル7例, 3レベル1例で, C₃₋₄ 1例, C₄₋₅ 5例, C₅₋₆ 12例, C₆₋₇ 7例であった. この手術は井須(釧路労災病院)により紹介され採用しているが, William's spinal saw を用い, 椎体をブロックとして採取, これを前方固定に用いるものである. 手術の特徴として椎体をブロックとして採取するために osteo-phytectomy, OPLL の除去などの際 spreader を用いなくても十分な視野が得られることが第一にあげられます. 第二に腸骨を採取しなくてよいこと. セラミックなどに比較して骨化が早いような impresssion があげられます.

これらの特徴よりすぐれた手術方法であると考えられました.

2B-19) 頸椎後縦靭帯骨化症に対する前方除圧固定術

—頸椎椎体より採取した骨片を移植骨として用いた頸椎前方固定術—

井須 豊彦・鎌田 恭輔
浅岡 克行・藤本 真 (釧路労災病院)
板本 孝治・小林 延光 (脳神経外科)

頸椎後縦靭帯骨化症に対する前方除圧固定術は, 顕微鏡手術の普及により, 安全に行われる様になって来たが, 従来の手術法では, 腸骨採取部位に関する合併症は避けられない. 今回, 我々は, 頸椎椎体より骨片を採取したのち, 後縦靭帯骨化巣を摘出, その後, 採取された骨片を移植骨として用いた頸椎前方除圧固定術を行い, 良好な手術結果を得たので報告する.

対象: 対象は, 過去1年6ヶ月の間に, 本法が施行された13症例であり, 手術椎間数別では, 1椎間3例, 2椎間8例, 3椎間2例(2例共 without fusion 併用)である.